

令和7年度 協働のまちづくり活動支援事業報告会を開催しました！

■開催の趣旨

市民と行政による協働のまちづくりを推進するため、NPO・市民活動団体等と市民の皆さんとの交流と地域コミュニティの再生や住民主体のまちづくりを考える機会として、市が採択した協働のまちづくり活動支援事業の成果発表となる令和7年度報告会を開催しました。

- 日時：令和8年4月18日（土）午後1時00分～午後2時30分
- 場所：市民交流施設ぷらっと交流サロン（江別市東野幌本町6番地43）

■報告団体

- 【1】特定非営利法人恩おくり（該当ページ：1～4）
- 【2】こども支援ワーカーズ みんなのいえ（該当ページ：4～6）
- 【3】オレンジカフェ大きな木（該当ページ：7～12）

■コメンテーター



（写真左から）

- 小内 純子 氏（札幌学院大学 名誉教授）
- 砂川 英雄 氏（江別市自治会連絡協議会 会長）
- 松山 和子 氏（江別市生涯学習推進協議会）

■各団体の事業報告及びコメンテーター・会場からの質疑等（概要）

【1】NPO 法人恩おくり

事業名：江別市内に子ども食堂を広めよう！広報&開拓大作戦

【実施内容】

当団体は、1小学校区内に1つ以上の子ども食堂の開設を目指し、次のような取組を実施した。

令和7年度応募事業の構成

チラシの制作と配布

現在開設している子ども食堂の情報、子ども食堂の運営者のための学習会の開催やサポート・相談に関する情報を掲載したチラシ（右図）を制作し、公共施設等に配布、掲示を行った。

学習会や相談、活動サポートの実施

当団体のノウハウを生かし、各学区でも子ども食堂の取組が広まるよう学習会等を開催。

相談実績：6件

学習会開催実績：2件



【結果と考察】

- ・問い合わせや相談を経て、子ども食堂に関心がある人が多いことは分かったが、主催となると不安や負担が多い。
- ・改めて子ども食堂とは誰のために行っているものなのか、そして、気軽に歩いて行ける場所に安心できる居場所が複数ある環境を整えることが必要。

【今後の展望と課題】

- ・子ども食堂に関する正しい理解を広めていく必要があり、一団体の任意ではなく、市として江別の現状に合う子ども食堂ガイドブックが必要。
- ・子ども食堂ネットワークと市が把握している現状に齟齬があるため、正しい情報が広まることが大切。
- ・今年（令和8年）3月に従来のフードサポートネットワークを江別こども食堂ネットワークと改めてリスタートを切って、市内の団体との連携を強化していく。

【収支決算】

- ・収入：24,000 円
内訳は、協働のまちづくり活動支援事業からの補助金
 - ・支出：17,089 円
内訳は、旅費・交通費、印刷製本費、使用料
 - ・収支の差額：19,817 円
- 予算が余ったため、4月30日までに13,000円を返還予定

◆質疑応答

Q：松山委員

市内の全ての小学校区に1つずつ子ども食堂があることを目指しているのか。子ども食堂という名称でなくても、子どもが気軽に立ち寄れる居場所のようなものを想定しているのか。

A：特定非営利活動法人恩おくり

最低でも1つの小学校区に1つ以上の、子どもが選んで行ける居場所を作りたいと考えている。絶対に子ども食堂でなければならないとは考えていない。私たちが子ども食堂にこだわっている理由は、運営する大人にも役割が生まれるからである。対象を限定していない子ども食堂が多いため、多世代の様々な方が役割を持てる居場所になると考えている。

Q：砂川委員

結果と考察の中で、主催者の「たくさんの人を呼びたい」という思いと、本来の居場所としての目的にズレが生じているのではないかという指摘があった。このような運営者は今後増えると考えているか。また、市が把握している情報と全道の間支援団体が把握している情報が異なるとのことだが、具体的にどのように違うのか。

A：特定非営利活動法人恩おくり

たくさんの方が来ることが駄目だというわけではなく、大規模な食堂にはそれぞれの良さがある。し

かし、規模が大きくなると一人ひとりの顔と名前を覚えることは困難になる。居場所である以上、顔を合わせて名前呼び合い、また会おうねというつながりが大切だと考えている。そのため、小規模な子ども食堂があちこちに複数できることが望ましい。しかし、イベント的にたくさん人が来たら嬉しいという運営者の心理も働くため、イベントではないという線引きを学習会で伝えていく必要があると考えている。

次に、情報の実態についてであるが、市が把握している情報は過去に立ち上がった団体を蓄積したものであり、すでに活動をやめてしまった団体も掲載されたままになっている。市では 19 箇所あると認識しているが、実際には 8 箇所程度しかなく、当ネットワークに加入しているのは 7 箇所である。一方で、全道の間支援団体であることも食堂北海道ネットワークには子ども食堂の明確な定義がないため様々な団体が登録しており、市はその情報を把握していないなど、全くバラバラな状態である。

Q：小内委員

収支決算で予算を使い切れなかった理由は、予定通りに活動がいかなかったためか。また、相談件数 6 件のうち、実施が 1 回で終わってしまった理由は何か。関心はあるものの実施に至らない場合のハードルはどこにあるのか。さらに、新しく設立した江別子ども食堂ネットワークについて、フードバンクのネットワークとは別組織になったのか、切り替えたメリットや寄付が減る心配はないかについても教えてほしい。

A：特定非営利活動法人恩おくり

まず、予算についてであるが、学習会を経て子ども食堂の実施に至ったのが 2 団体のみであったためである。当初は少なくとも 3 団体に対して最低 2 回は活動サポートに行く予定で予算を組んでいたが、実施回数が減ったことで支出が抑えられた。

次に、1 回でサポートが終了したケースについてであるが、私たちが把握している限りでは活動自体も 1 回で終了しており、その後は連絡が取りづらいつい状況になっている。実施に至らないハードルについては、個人の場合「やってみたいが自分では難しいので他の人にやってほしい」という相談や、見学を希望されたが日程が合わなかったというケースがあった。また、企業からの相談は営利目的であったため、こちらからお断りさせていただいた。

最後に、ネットワークについては名称を変えリスタートする形で 4 月 1 日からはじめており、外部に対して非常に分かりやすくなったことが最大のメリットである。以前の「フードサポートネットワーク」という名称では何をしている組織か分かりにくかったが、名称を変えることで江別にも子ども食堂があることが伝わりやすくなると期待している。食品の寄付が減るといった心配はしておらず、引き続きフードバンク事業者としても活動し、情報を発信していく予定である。

Q：会場

子ども食堂という名称について、子どもを対象とした食堂であるという前提に立っているため、本来の目的が伝わりにくいのではないかと。関心を持った人がインターネットで検索した際に正確な情報が得られるよう、市の協力を得て情報発信してほしい。

A：特定非営利活動法人恩おくり

子ども食堂という名前である以上、子ども限定だと思われがちであるという課題は認識している。し

かし、全国的に「子ども食堂」という言葉が定着しているため、あえてその名称を使用しつつ、各団体は「よりあい食堂」など独自の食堂名をつけて工夫している。また、検索した際に市のホームページ等で正確な情報にアクセスできるよう、今後も市に働きかけていきたいと考えている。

コメント：会場

恩おくりの大麻の活動拠点の近くに住んでいるが、小規模ながら商店街の活性化にもつながる素晴らしい活動をしていると感じている。行政が支援するような大規模なものだけが子ども食堂ではないということ、もっとアピールしてほしい。

【2】こども支援ワークスみんなのいえ

事業名：おおあさBASEを活用した地域交流企画

【目的及び実施内容】

おおあさBASE（学校に行く子も行かない子も、ふらっと遊びに来られる居場所）にて、イベントがあることで周知や告知がしやすくなり、初めての子どもたちが参加するきっかけになると考え、様々な企画を実施。その一つとして、地域の多様な大人と関わる機会を作るため、大麻銀座商店街の方々に講師をお願いした。

＜企画概要＞おおあさBASEは全37回開催し、そのうち9回をイベント開催にあてた。

▶ 「花遊び」（花美さん）

フラワーアレンジメントやリース作りなど

▶ 「アート体験」（アトリエとりむしさかなさん）

パステルアートやオーナメント作りなど

▶ 「職を通したイベント」（みんなの家のスタッフ）

パン作りを2回、東地区センターでの味噌作り、スイーツ（クレープやパンケーキ）作り

【実施結果】

参加人数のベボランティアを含め150人以上となり、昨年度から大きく増加、ボランティアの中には不登校を経験した20歳の子も来ており、子どもたちにとっても良い機会となった。特に中学生の参加が増えたことが特徴。参加者が増えただけでなく、一緒にイベントを経験することで子ども同士の距離が近づき、仲良くなれるきっかけ作りとしても非常に大きな効果があった。

【収支決算】

・収入：199,733円

内訳は、自己資金、協働のまちづくり活動支援事業からの補助金

・支出：委託料、食糧費、備品購入費、印刷製本費、消耗品費

委託が減った分を消耗品費などに回したが、それでも予定（188,750円）より多くかかったこともあり、不足分はスタッフからの寄付という形の自己資金で補っている。

【今後の展望】

2026年の展望としては、子どもたちからは「散歩にお出かけしたい」「バドミントンをやってみたい」「スイーツ作りをしたい」といった声が寄せられており、商店街との新たなコラボレーションも模索している。また一から「たまりば」の再建を目指し、おおあさBASE週1回のペースで活動を続けていきたい。

◆質疑応答

Q：松山委員

37回の活動で延べ150名という報告があったが、この150名には活動メンバーのスタッフも含まれているのか、それとも参加者のみの数なのか。また、37回の活動の中に9回のイベントは含まれているのか、それとも別なのか。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ

年間を通した37回の活動のうち、約月1回のペースで開催した9回がイベントである。参加者の延べ人数150名は37回トータルの人数であり、スタッフは含まれておらず、子どもと保護者の数である。

おそらく、実際は180から200名程度が参加していたが、火災によりすべての資料が焼失してしまった。そのため、記憶を頼りに確実な数字だけを挙げた結果、150名以上という報告になっている。

Q：松山委員

火災により資料が散逸するなど大変な目に遭われたと推察する。「たまりば」は9月からの開催で1、2回しか実施できなかったと思うが、参加した中高生はどのくらいいたのか。また、北海道新聞に学童の子どもたちとメンバーが出迎える写真が掲載されているのを見て、子どもたちに居場所があってよかったと痛感した。自宅でも学校でもない、はざま期の年齢である中高生の居場所を考える大人がいることは非常に大切である。再開に向けて大変かと思うが頑張してほしい。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ

「たまりば」には4、5人の中学生が来ていた。学童保育の時間帯は12時からおやつ作りなどが始まるため帰ってもらっていたが、「たまりば」を開設したことで、お弁当を持参してそのままおしゃべりをして帰ったり、10時から12時まで自習した後も残って自習を続けたりと、時間を気にせず使えるようになった。数回の開催であり、イベントとしては2回であったが、イベントがない日でも「たまりば」に寄っておしゃべりやパソコンなどをして、良い感じで使い始めていた矢先に火災に遭ってしまった。

Q：砂川委員

不登校対策の対象者は中高生と記載されているが、小学生に対してはどのように対応しているか。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ

小学生も対象にしている。中高生対象としているのは「たまりば」の自習室の方である。不登校支援の「おおあさBASE」には小学生や母親と一緒に来る子どももおり、現在は中学生がメインで来ている。

Q：砂川委員

活動回数が多く、味噌作りやスイーツ作りなど準備に手間がかかると思うが、常時何名くらいのスタッフで運営しているのか。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ

メインは本日登壇している3名で対応している。その他にボランティアで英語の先生が来て学習支援などを行ってくれている。火災の後も続けていきたいという思いから、冬休み明けからあちこち場所を借りながら活動を続けた。

Q:砂川委員

様々な活動を続ける中で参加者同士が知り合い、コミュニケーションが取れていくのは目指すところだと思うが、その中で学校への復帰に至った生徒はいたか。

A:こども支援ワーカーズ みんなのいえ

私たちは学校への復帰までは目指しておらず、気軽にここへ来て心を解放してもらえればという思いで活動している。そのため復帰という形とは少し異なるが、中学校を卒業して無事に通信制高校に進学した子どもなどはいらる。

Q:小内委員

「おおあさBASE」は引きこもりがちの子どもが行く場所と思っていたが、「誰でも来れるみんなの居場所」として時間を限定せず開けることで、逆に引きこもりがちの子どもが来にくくなるような影響はないか。

A:こども支援ワーカーズ みんなのいえ

おおあさBASEは不登校支援が目的で始まったが、不登校の子どもは平日の午前中など学校がある時間に行く場所がない。「不登校」と括ることは世の中的にも良くないと考え、多様な事情の子どもがいることを前提に「誰でも来られる」と打ち出した。

実際には時間帯で棲み分けができており、学校に行っている子どもは放課後の夕方の時間帯に寄ることが多い。そのため、誰でも来られると言ったことによって来づらくなることは今のところない。むしろ少しずつ交流が生まれることは望ましいことであり、「不登校」と括らないことも大事だと考えている。

Q:小内委員

学校に行かない時間帯に来る場合、小学生が早く帰ってきた時などに、不登校の中学生と学童の小学生との交流はあるか。

A:こども支援ワーカーズ みんなのいえ

不登校支援に来ていた中学生の女の子が、そのまま残って学童の子どもたちと一緒におやつを食べて帰るといったことがあり、非常に良い交流になっていた。様々な形で子どもたちが元気を取り戻すパターンがあると感じている。

Q:会場

手間のかかるイベントをやっているが、物理的な問題として、親が車の乗り合わせをしたり、交通費を出してあげたり、バスの便を案内するなど、物理的な距離の問題の解消法は考えていないか。このような活動は江別の他の場所では簡単にはできないと思うので、広域的な参加者を募る体制ができれば良いと感じた。

A:こども支援ワーカーズ みんなのいえ

私たちの団体が市内の不登校の子ども全ての受け皿になるとは考えていない。基本的には市が運営する「ねくすと」が野幌にあるが、子どもが自分の足で歩いていける場所に居場所があることが大事だと

考えている。遠くから来るには親が仕事を休んで送迎する必要があり負担になるため、大麻に身近な場所があればとスタートした。そのため、市内全域をフォローするのは別問題だと考えている。広域的な参加者を募るという点については、貴重なご意見として受け止めたい。

コメント：会場

火災の件は大変だったと思います、是非、復活してほしい。たまりばに来る子どもたちには不登校というレッテルを貼らないようにしつつ誰でも来られる場所にしてほしい。

【3】 オレンジカフェ大きな木

事業名：大きく育てオレンジカフェ～周知の拡大と居場所の充実～

【目的及び実施内容】

・目的～周知の拡大と居場所の充実～

交流の場所づくり、早期支援、そして気軽に相談できる場所づくり

・オレンジカフェ大きな木について～開設と応募の経緯～

大きな木の下で誰でもが集まれるような場所を作りたいという思いで2年前に始め、去年はさらに周知させたいと考えて支援事業に応募。認知症の方やそのご家族で、一人で出かけるのは不安だけれども誰かと話をしたいと感じている人や、介護で悩んでいる人が気軽に相談できる場所が必要ではないかと感じ、この事業活動を開始。

・実施内容

月に1回、毎月第3月曜日に、市民交流施設「ぷらっと」で開催

<周知活動>

チラシ（野幌郵便局と野幌駅前郵便局のラック）を作成、まんまる新聞への広告（6月13日号）掲載、そして来てくださった方に次回の予定を知らせる「また来てね」カードを作成。

カードは日付を書いて帰る方にお渡ししていたが、帰り際は慌ただしく全員に渡すのは難しかったため、新しく来てくださった方や久しぶりに来てくださった方に集中的にお渡しし、毎月来ている方にはお渡ししていなかった。

<知名度を高めて参加者を増やすため>

ふまねっと講師やメナードの美容部員などを招き、各種イベントを開催。

・6月

メナードの美容部員の方2人来ていただき、無料でハンドマッサージのサービスを行った。参加された方からは手がすべすべして気持ちよかった、お話ができて楽しかったという声があった。

・7月と10月

シルクハットによるマジックと腹話術であった。最近が高齢者を狙った詐欺が多いため、腹話術の人形を使って詐欺について分かりやすく伝えていただいた。マジックについては、皆さん前の方に座り興味深く見ており、頭が疲れたとおっしゃる方もいた。

・8月と3月

厚真のけん玉クラブの方に来ていただいた。お皿に乗せるなどの難しい技ではなく、2個のけん玉を使ってバランスを考えたり、上から落としてお皿に乗せる感覚を養うなど、脳トレに良い頭を使う内容を1時間行っていただいた。

3月の2回目のけん玉クラブでは、けん玉検定を実施し、頭の上にけん玉を乗せてユニコーンの形にできたら合格という内容で、参加者全員が合格してはんこをもらい喜んでいました。

・9月と12月

足腰を鍛えてフレイル予防をするため、ふまねっとの講師の方に来ていただいた。

<居場所の充実>

そのほか、けん玉、花札、ルービックキューブを購入した。当初はカルタを購入しようと考えていたが、寄付などでたくさんいただくことができたため、参加者に何がしたいか聞いたところ花札などの要望があり購入に至った。なぜかけん玉にハマる方が多く、毎回けん玉を使って一生懸命遊んだり練習したりしている。

【結果と考察】

<周知活動>

郵便局2箇所に50部ずつ、合計100部のチラシを1ヶ月間置いた。ラックから減っていた枚数は2箇所合わせてわずか10枚であった。知り合いでチラシを見たという方はいたが、実際に訪ねてきた方の中でチラシを見て来たという方はいなかったため、郵便局でのチラシの効果は感じられなかった。

まんまる新聞の広告を見て来たという方は新札幌からいらしたお一人だけであった。知名度を高める効果については、見てくださっている方はいるかもしれないが、実際の参加者が1人であったため、あまり効果を感じることはできなかった。

「また来てね」カードについては、継続を促すために配布しているが、全員にきちんとお渡しできていないこともあり、効果は不明である。

<イベントの効果>

・メナードのマッサージ

気持ちがよかった

・シルクハットのマジックと腹話術

興味津々で身を乗り出して見ていたなど好評

・ふまねっと

簡単な動きで体を動かすものだが、参加人数が10人以上に対してネットが1つだったため、見ている時間が長すぎたという意見があった。

・けん玉

脳トレになり、参加者のリクエストが多く2回目を開催した。全体として「楽しかった、また来るね」という感想が多く、イベント目的で来ている方もいらっしゃり、参加意欲につながっていると思う。

イベントによって知名度が上がったかはわからないが、現在参加されている方の継続の気持ちには確実につながっている。新しい遊びを用意したことで参加者のニーズに対応し、飽きないような交流の場に近づいていると思う。

【収支決算】

・収入：95,497 円

内訳は、自己資金、協働のまちづくり活動支援事業からの補助金

・支出：報償費（利用者の声を受け、ふまねっとの方に急遽 2 回目を来ていただいたため予算より増）、印刷製本費（団体予算通り）、役務費（まんまる新聞の方が個人で活動しているなら安くすると広告料を約 2 割引）、消耗品費

【今後の展望】

参加者が楽しかったからと友人を誘ってくれることで新しい参加者が増えているため、今後も楽しめる場づくりを続けたい。けん玉は根強い人気があるので年 1 回くらいは来ていただけたらと思っている。

【課題】

事前に人数を把握せずどなたでも自由に参加できる形にしているため、想像以上に参加していただき椅子が足りなくなってバタバタしてしまった日があった。また、毎月来ている専属スタッフが私 1 人であるため、相談に乗ってほしいという方がいらっしやると、オレンジカフェの運営は居合わせたボランティアの方に任せることになってしまう。さらに、現在参加費 100 円で運営しているが、場所代などを引くと毎月赤字になってしまうため、費用捻出が今後の大きな課題であると考えている。

◆質疑応答

Q：松山委員

チラシの配布先について、郵便局だけに置かれたとのことだが、例えば地域包括支援センター（第 1 包括）や介護施設など、認知症の認定を受けるか迷っている方や困っている方からの問い合わせが来るような場所に置くといった工夫も必要だったのではないか。

A：オレンジカフェ大きな木

今回の令和 7 年度事業の報告には記載しなかったが、始めた当初から数ヶ月間は第 1 包括を回ったり、市役所、社会福祉センター、そして開催場所である「ぷらっと」にチラシを置かせていただいたりという活動を令和 6 年度に実施している。

Q：松山委員

チラシは多くの人の目に触れ、そこから持って行ってもらう形が良かったと思う。また、認知症の診断を受けていない方なども含め、分け隔てなく過ごせる場所ができたことは非常に良いことである。利用者に対して、参加した日に「今日はどうだったか」「次はこんなことをしてほしい」といった希望や振り返りを聞くアンケートなどがあれば、次へ活かせるのではないか。さらに、認知症の方に限定せず広く利用されている点は大変良いが、広告費やまんまる新聞への掲載費もかかっているため、印刷物を有効に活かす方法や周知の拡大を考えて次年度も頑張りたい。

また、今年度はイベントが多く経費もかかっていると思うが、参加費 100 円での運営は難しくなってくるのではないかと心配している。具体的な解決案などがあれば教えてほしい。

A：オレンジカフェ大きな木

チラシについては、今後も様々な場所に置かせていただこうと考えている。アンケート用紙という形では取

っていないが、参加者には「今日はどうでしたか」と声をかけている。その結果、「けん玉が面白かったからまたやりたい」という声があり予定通り2回実施したり、「絵手紙を描きたい」という声に応じて道具を揃えて実施したりしている。あまり楽しんでいない様子の方には「どういうことをしたいか」を聞くようにしている。

周知を進める一方で、場所の広さから参加人数は10人から15人が限度だと考えているため、その人数の把握方法も課題である。参加費100円については、物価高騰もあり運営が難しくなっているのは事実である。将来的に見直すタイミングがあるかもしれないが、私としては続けられる限りは100円とし、私自身が働きながら援助する形で続けていきたいと考えている。

Q:砂川委員

参加者の対象が認知症の方となっているが、実態はどうか。

A:オレンジカフェ大きな木

「認知症ですか」と直接聞くことはないため確実ではないが、見た感じや肌感覚で、10人の参加者のうち3~4人程度がいらっしゃると感じている。

Q:砂川委員

残りの方々は健常者ということか。

A:オレンジカフェ大きな木

残りの方々は、ご本人と一緒に来たご家族や、「こういう活動に興味があるのでお手伝いに来た」という方々である。

コメント:砂川委員

実施報告を見ると、昨年度は7回開催しており、場所も「ぷらっと」の会議室という非常に立地の良い場所であるため来やすいのだと思う。認知症の方だけでなく、近くの高齢者もぷらっと集まって楽しいことができる恵まれた環境である。スタッフの話でも、盛り上がり笑い声がたくさん聞こえるとのことだった。そうした素晴らしい活動であれば、会費を100円から少し上げても、皆さんは喜んで参加してくれるのではないかと。また、一緒に行くスタッフが1人でも増えれば、より充実した内容になると思う。

Q:小内委員

7回の開催で、延べ参加者数はわかるか。

A:オレンジカフェ大きな木

令和7年度の延べ参加者は145名である。

Q:小内委員

それ以前は何人だったか。

A:オレンジカフェ大きな木

始めた当初は私1人で座っている状態から始まり、徐々に2人、4人と増えていった。令和6年度の最後の方には8人から10人程度になっていたため、現在は毎回10人から15人程度と、少しずつ増えてきている。

コメント:小内委員

その数を見ても、まんまる新聞への掲載などによる広報の効果は確実にあったのだと思う。ただ、チラ

シヤポスターを見ると、どんな人が行けばいいのかわからず、行ったら何ができるのかわからず少し分りにくいと感じた。写真を見るととても楽しそうなので、「こんなことをやります」という文字をもう少し大きくするなど、アピールの仕方を工夫してはどうか。

A：オレンジカフェ大きな木

検討してみる。

Q：小内委員

7回の開催のうち、リピーターはどのくらいいて、すべて参加の方もいるのか。

A：オレンジカフェ大きな木

リピーターは多く、半数以上を占めている。すべて参加している方もいる。

Q：小内委員

付き添いで来ている方は参加せず見ているだけか。

A：オレンジカフェ大きな木

一緒に参加してお茶を飲んだりゲームをしたりして遊んでいる。

コメント：小内委員

付き添いの方も含め、参加することで朗らかになったり落ち着いたりする効果があると思う。非常に有意義な活動なので、どのような意義や効果があるのかを聞き取り、記録として残すことに力を入れてみてはどうか。

A：オレンジカフェ大きな木

分かりました。

Q：会場

認知症には早期の MCI（軽度認知障害）などもあり、状況は様々だが、何かをするというよりも「自分の状況を話す相手がいる」というだけで気が楽になり助かるというケースも多い。そのため、何かを用意することばかりでなく、話せる機会を作ることが大事だと思う。また、開催が月に1回とのことだが、現在はお年寄りにもネットが普及しているため、学ぶ機会を設けてネットを使えるようにしてはどうか。1度会えば信頼関係ができるので、冬など外出が難しい時期でも、月に1回の対面を補う形でネットでの交流を考えてみてはどうか。

A：オレンジカフェ大きな木

ネットでの交流は考えたことがなかった。相手の表情なども大事だと考えており、顔を見て直接お話をしたいと思っている。しかし、月に1回の開催を補う手段として検討してみたいと思う。

Q：会場

「オレンジカフェ」というネーミングは、認知症に関するシンボルカラーであるオレンジからつけられたのか。対象者がわかりづらいという意見もあったが、ネーミングから連想できるようになれば良いと感じた。ネーミングの由来を教えてください。

A：オレンジカフェ大きな木

「オレンジカフェ」は全国的に認知症の方を対象とした集いの場の名称として使われているため、周知しやすくなると考え採用した。「大きな木」という部分については、私の苗字（大木）から取ったと思

われることが多いが、そうではない。チラシのイラストにあるように、大きな木の下でみんながゆっくりくつろいで休める場所、認知症の人もそうでない人も誰でも来られる場所を作りたいという思いから「オレンジカフェ大きな木」と名付けた。

コメント：会場

すごく素敵な由来だと思う。これからも頑張してほしい。

A：オレンジカフェ大きな木

ありがとうございます。

■コメンテーターの総評

松山委員

すべての事業に共通して言えることだが、人と人とが交わる繋がり大切さ、SNSが主流になってきた時代に、孤立しがちな人たちに届くような、人と人が顔を合わせてつながる居場所の重要性を再認識した。地域が地域として形成しづらくなってきている中で、子どもの成長期にとって大事なことをしている素晴らしい活動であると感じた。江別は子どもが笑顔になっていける街になっていくのだろうという実感を持った。

砂川委員

自治会を担当する観点で聞かせていただいた。恩おくり、こども支援ワーカーズみんなのいえについては大麻という地域に根付いて、存在価値が高いと思う。これからも続けていってほしい。オレンジカフェ大きな木は無理なく一人でもできる体制でやっていただいているが是非この活動を続けていってほしい。

小内委員

恩おくりとみんなのいえは、何回か継続して応募しているが、毎年確実に活動が広がって階段を上っている感じを受けている。素晴らしい活動だと思う。特にみんなのいえは、火災という予期せぬ困難にもめげず前向きに取り組んでおり、その姿勢に感銘を受けた。

オレンジカフェについては、仕事を持ちながらの活動は大変だと思うが、これからも長く続けてほしい。江別市の市民活動は非常にレベルが高いと感じる一方で、参加する団体数が伸び悩んでいるという課題もある。今後は、活動を始めたばかりの団体に対する手厚い支援、スタートアップ型と継続型に分けるなどより多くの団体が参加しやすい仕組みづくりも必要であると感じた。